執筆者一覧（本誌掲載順）

斎藤　歩（さいとう・あゆむ）
劇作家・演出家・俳優
公益財団法人 北海道演劇財団 専務理事・芸術監督
一九六四年、釧路市生まれ。
北大演劇研究会を経て、１９８７年に札幌ロマンチカシアター鮪鯡（ほうぼう）舎設立。一九九六年、北海道演劇財団設立に伴いＴＰＳ契約アーティストに就任。二〇〇〇年より（株）ノックアウト所属俳優として、東京での俳優・演出家の仕事を開始する一方、札幌でも二〇〇一年からＴＰＳチーフディレクター。二〇一六年四月より、札幌に移住し、北海道演劇財団の常務理事・芸術監督に就任。
二〇一八年七月より専務理事・芸術監督に就任。
札幌を拠点にした演劇創造、東京を拠点にした映画、テレビ、舞台出演など活動は多岐にわたる。

吉崎　元章（よしざき・もとあき）
公益財団法人札幌市芸術文化財団　市民交流プラザ事業部 センター事業課長（札幌文化芸術交流センター　ＳＣＡＲＴＳ プログラムディレクター）
札幌芸術の森に一九八六年のオープン時より勤務し、一九九〇年開館の札幌芸術の森美術館に準備期から学芸員として関わり、ヴィーゲラン展などの彫刻の展覧会や、「中根邸の画家たち」「さっぽろ・昭和三〇年代」などの札幌の美術を扱った展覧会を多く手がける。一般財団法人地域創造参事を経て、二〇一八年四月より現職。

飯塚優子（いいづか・ゆうこ）
レッドベリースタジオ主宰、アートコーディネーター、スクリプター、コピーライターを経て、４丁目プラザ企画宣伝部入社。４プラホール、駅裏八号倉庫を通じてアートスペースの運営や地域演劇のマネジメントに携わる。二〇〇〇年から私設空間を運営し、ジャンルを問わず魅力ある表現者との交流を拡げるとともに、札幌の舞台芸術振興や基盤構築に関する提言活動に関わっている。二〇一三年度から札幌演劇シーズン事務局長。

安念優子（あんねん・ゆうこ）
一九五二年留辺蘂町で生まれる。江別高校で演劇と出会う。一九八一年夫と小劇場ドラマシアターどもを開くと共に、劇団ドラマシアターどもを旗揚げする。ライフワークは、平和をテーマにした二人芝居？「ババ漫才」の出前公演。（３・11以後、フクシマ放射能学習編なども）普段は喫茶ドラマシアターどもの店主（江別市二条二丁目七－一・ドラマシアターども）

舞台芸術研究プロジェクト研究員

森一生（もり・かずなり）
北翔大学客員教授
札幌静修高等学校演劇部顧問就任（昭和四二年）以来、長年にわたり高校演劇指導に尽力し、同校を二度の全国優勝にまで導いた。全国アマチュア演劇協議会の創作脚本賞を受賞するなど、高校演劇の中心的存在として活躍してきた。札幌市文化奨励賞・北海道文化奨励賞・札幌市芸術賞受賞。

村松幹男（むらまつ・みきお）
北翔大学教育文化学部教授
北海道北見市生まれ。高校時代より演劇をはじめ、北大のサークル「劇団アトリエ」を経て、大学在学中の一九八三年に「デパートメントシアター・アレフ」の旗揚げに参加。全17作品に役者として参加。アレフ終了後（九〇年）、九二年に「Ｔｈｅａｔｅｒ・ラグ・２０３」旗揚げ。代表。劇作、演出、役者。

田光子（チョン・クワンジャ）
北翔大学短期大学部准教授
札幌市生まれ。在日韓国人。幼少時代にバレエ、日本舞踊、韓国舞踊を習う。大学では英文学を専攻し、シェイクスピア劇に関心を持つ。韓国・ソウル梨花女子大学大学院では韓国舞踊を実践・理論面において学び、重要無形文化財である金千興・李梅芳および梨花女子大学元教授の金梅子に師事。現在は北翔舞台芸術で舞踊芸術、身体表現などを担当している。

平井　伸之（ひらい・のぶゆき）
北翔大学短期大学部講師
埼玉県生まれ。北大のサークル「劇団アトリエ」を経て「劇団デパートメントシアター・アレフ」に参加。九二年「Ｔｈｅａｔｅｒ・ラグ・２０３」の旗揚げより参加。役者・演出。

森井綾（もりい・りょう）
北翔大学教育文化学部准教授
一九八八年北海道教育大学札幌分校卒業。以降フリーでデザイン業・デザインコンテンツを中心にディレクターを営む。九五年㈱アド

ビデオ北海道入社。二〇〇〇年四月㈱アドビデオ北海道退職。〇六年から、本学専任講師。〇九年から現職。

大林のり子（おおばやし・のりこ）
明治大学文学部准教授
神戸市生まれ。大阪大学大学院で演劇学専攻。二〇〇四年より七年間北翔舞台芸術の専任教員を務める。二〇一一年より現職。主に二〇世紀前半の上演および舞台美術の歴史研究。ドイツ語圏に出自を持つ演劇人の共同制作に根ざした舞台制作の状況、その国際的な活動について調査を進めている。

金田一仁志（きんだいち・ひとし）
日本俳優連合（西田敏行理事長）所属。日本演劇教育連盟全国委員。一九九五年、ロシア国内三劇場で、初の海外公演を成功させている。北海道教育大学、藤女子大学非常勤講師。九〇年札幌市民芸術祭奨励賞、九八年市民文化賞受賞。二〇〇〇年東京都フェスティバル（戯曲部門）全国ベストエイト入選。〇九年、日本演劇教育賞ノミネート。北海道新聞夕刊のコラム「舞台裏から」執筆は六年を記録。さっぽろ市民ミュージカル代表。

野田頭希（のだがしら・のぞみ）
役者、会社員（日本板硝子北海道株式会社）
苫小牧市生まれ。
北翔大学生涯学習システム学部芸術メディア学科舞台芸術コース卒業。
劇団Ｂ－Ｓｔａｇｅ所属。

編集後記

ＰＲＯＢＥ第一四号をお届けします。今年も発行することができました。執筆をしていただいた方々に心より感謝申し上げます。今年はいつにも増して編集作業が遅れ、ページ数が相当減少してしまいました。最後までお読みいただければ幸いです。

＊　＊　＊

四月一日に新しい元号が「令和」になると発表され、四月三〇日に第一二五代天皇が退位し、五月一日に第一二六代天皇が即位された。私は、昭和から平成への改元も経験しているので諸儀式をテレビ等でみることが出来たはずだが、正直言って、当時は興味も関心もなかった。だが、さすがに私も年を取り（まして、学生に演劇を教えるようになれば、日本の伝統芸能のことにもある程度の知識が必要となり）、今回の国事行為「剣璽等承継（けんじとうしょうけい）の儀」、「即位後朝見（ちょうけん）の儀」、「即位礼正殿の儀」、「祝賀御列の儀」、「饗宴の儀」は、興味をもった。大嘗祭（だいじょうさい）などのように“秘儀”と言われれば、ああ、日本の伝統だなぁ、なんて感じてしまったのである。

今年も異常気象の影響か、大型台風、大雨等による災害が起こった。
消費税も上がり、安倍長期政権が最長記録を更新した。日本がますます格差社会になっていっていると感じている。「桜を見る会」の事やその対応など、言いたいことは山のようにあるが、ここで書くことではないだろう。

犯罪が起こる度に、“防犯”カメラによる映像が流され、あぁ～どこにでも“監視”カメラがあるのだなぁと暗澹たる気分になる。
不明を恥じるが、グーグルからメールが来て（余りにも頭にきたのですぐ削除してしまい、正確ではないが）、二〇一九年のあなたのマップのようなメールで、私の行った場所を地図入りで、そして、行った場所の建物の写真なんかもあったりして、知らせてくれた。できるだけスマフォの位置情報をオフにしているが、旅行なんぞにでりゃ、オンにしている。何かの必要でオンにしてそのままオフにするのを忘れていたりする（今、確認したらオンになっていた。直ぐオフに）。なんで、グーグルさんに私の行動を監視されなければならないのか。余計なお世話である。
この怒りは、たぶん若い人々には理解されないだろう。監視されること（監視できること）が安心に繋がると思っていて、であるから、（大きな飛躍だが）「かぶき者」ははじかれるのだろう。そして監視しあうことに不感症である社会は、乱暴に言えば、ギスギスした嫌な社会なのだ。監視されることに不感症なのは、不寛容に繋がるのだ、と思う。

今年に入って、このＰＲＯＢＥで劇評を寄稿してくださっていた松井哲朗さんの訃報を聞いた。松井さんには本当にお世話になった。私が劇団を続ける原動力のひとつにもなっていた。次号で何らかの追悼をしたいと考えている。

（ｍａｒｕｍｕ）